

まず最初に、鹿児島は私にとって、とても大切に特別な場所になったということを伝えたいです。その気持ちをすべて言葉にするのは簡単ではありませんが、皆さんの生活の中に迎え入れていただいたとき、私が何を考え、何を感じていたのかを、少しでも共有できたらと思い、書くことにしました。

最初に心を打たれたのは、深く生い茂る森でした。これまでも緑豊かな場所を訪れたことはありますが、太く背の高い竹が、わずかな隙間に身を寄せ合い、風に揺れている光景は、私にとって初めての体験でした。柿の木を見るのも新鮮で、帰国後に見た葉の落ちた木々は、その柿の木を思い出させました。アメリカにも冬には葉を落とす木がありますが、日本の木々には、枝がしなるほどのオレンジ色の実が残っています。それを見た後では、故郷の木々が少し寂しく感じられました。

来日前、私は「ここに住む人たちはどんな人たちなのか」と聞かされていましたが、実際に会ってみるまで、本当の意味では分かっていませんでした。出会ったすべての人が、例外なく、私の少し風変わりな外国人らしい振る舞いを温かく受け入れてくれたことに、心から驚きました。アメリカでは、親切であることが必ずしも当たり前ではありません。

家族として一緒に訪れた場所や、共に過ごした時間の中で、私はこの土地や人々が持つ、自然で飾らない美しさに何度も心を打たれました。中でも特に印象に残っているのが、みかん狩りです。あの体験は、この旅で私が最も強く感じた「土地の豊かさ」と「人の温かさ」の両方を象徴しているように思います。みかん狩りでは、農園のオーナーさん、その娘さんたち、そして作業をされている方々と出会い、みかんの正しい採り方を教えていただきました。

ただみかんを採るだけの時間でしたが、それが旅の中でも特別な思い出になっています。作業が一段落した後、私たちはみんなで、みかん畑のある丘を歩いて登りました。そこからは、谷一面に広がる緑と青の景色が、どこまでも続いていました。その景色を眺めながら、私は「日本語でみんなと会話ができている」ことに、心からの喜びを感じていました。

それは、私にとって想像もしなかったほど大きな達成でした。考え、話し、読み、訳し、そして生活する。かつてはただ思い描きただけだった「別の世界」で、私は実際に生きていました。こうした日本の地方での暮らしは、写真や物語の中でしか触れられない、遠い夢のような存在でした。その夢を、皆さんと一緒に生きることができたことに、心から感謝しています。

共に交わしたすべての会話、出会ったすべての人、訪れたすべての場所、読み取るのに苦労した標識、新しく覚えた漢字。その一つひとつのそばに、学びを支えてくれる人たちがいてくれたことが、本当に心強かったです。日本へ行くことは、私にとって簡単な挑戦ではなく、留学生としてやっていけるのか不安もありました。

それでも最終的には、自分が思っていた以上に日本語で話せていたこと、そしてアメリカの人々と日本の人々が、国を越えても驚くほど似ていて、どこか懐かしさを感じる存在であることに気づきました。この世界を見せてくれて、ありがとうございました。そして、その一部として迎えてくれたことに、心から感謝しています。